

教職支援室便り (3月号)

担当者最終号

令和8年 3月13日 (金)
文責：教職支援室 曾我文敏
☎0985-20-4808

退職のご挨拶

教職支援室を担当しています、曾我文敏です。この度、退職することとなりました。長い間教職支援室便りを読んでいただくなど、様々なご支援に心から感謝申し上げます。下欄にありません通り令和元年度から統計を取り始めて、本年度で延べ約4800名の皆様に、教職支援室を活用していただきました。重ねて感謝申し上げます。

これまで取り組んできた職務を振り返りますと、本学の学生の皆さんはもちろんのこと、卒業生、学校現場の先生方、教育関係機関の方々等への支援に、微力ながら取り組むことができたことは、私にとってかけがえのない財産になっています。教職への理解を深める教職課程の授業(生徒指導、道徳教育、教育実習、教職実践演習)、教員としての資質・能力の向上を目指す「教職特別講座」、日々の相談支援活動、地域貢献を目的とした講義・講演活動など、多くの皆様と教育(教職)に対する思いを共有することができました。

「教職特別講座」につきましては、これまで137名の学生の皆さんと、教員採用選考試験対策を通して、教育(教職)に対する理解を深める貴重な時間を共有してきました。そして、この「教職特別講座」は、採用試験合格のためだけにあるのではなく、学生の皆さん一人一人が、教員になりたい自分を見つめ続ける学びであったと考えます。その中で、教員としての資質・能力の基礎が培われていったと思います。そのために、可能な限り講座の時間を確保する中で、意図的・計画的に、多面的・多角的に講座内容を工夫したり、受講者のニーズに十分に応えることができる資料づくりに努めたりしてきました。結果、この「教職特別講座」は、他にはない取組であるという、とてもありがたい評価を、関係者の方々からお聞きすることもありました。

近年特に、教員採用に関する問題・課題が山積しています。それだけに、採用前教育における大学教育の果たす役割は、非常に重要であると考えます。大学教育において、いかに人材を育成するかは、日本の学校教育の未来がかかっていると言っても過言ではないと思います。

最後にもう一度お礼を申し上げます。本当にお世話になりました。ありがとうございました。

本年度・教職支援室活用者数「延べ4792名」

<過年度：教職支援室活用者数>

令和元年度：333名	令和2年度：471名	令和3年度：678名
令和4年度：773名	令和5年度：837名	令和6年度：983名
令和7年度：717名 (令和8年2月末現在)		

「教職特別講座の思い出」卒業生からの寄稿

10月号から、「教職特別講座の思い出」をテーマに、卒業生からの寄稿文を掲載してきましたが、今回は最終回となります。

宮崎県立小林高等学校の畠中康希さん、宮崎県立宮崎商業高等学校の興梠宗真さん、和歌山県立那賀高等学校の桶谷宗史さん、神奈川県立綾瀬西高等学校の朝倉智恵さんの寄稿文を紹介いたします。お忙しい中、本当にありがとうございました。

令和元年3月卒業
宮崎県立小林高等学校 畠中康希さん

宮崎県立小林高等学校に勤務しております、畠中康希と申します。宮崎公立大学には2014年から2019年まで在籍していました。宮崎県で教員になることを志し、小林高校から宮崎公立大学へ進学しました。公立大学を選んだ理由の一つが、教職特別講座の存在でした。どの大学よりも宮崎県で教員になるための体制が整っていると確信し、受験しました。

公立大学の教職特別講座では、期待以上の経験を積むことができました。一番の思い出は、授業がない日も毎日、一次試験合格のために大学へ通い、勉強したことです。私は高鍋から車で通学していましたが、この勉強会を苦に思ったことは一度もありません。むしろ、この教職特別講座に参加することを楽しみにしていました。それは、教員採用試験合格のために共に勉強に励んだ仲間が存在、そして私たちのために心から寄り添い、支援して下さった曾我先生のおかげであることは間違いありません。同じ志を持つ学生と、夢の実現に向けて切磋琢磨した日々は、今でも忘れることができません。

私の努力不足が原因で、大学4年生の時に合格することはできませんでした。大学卒業後、日南高校で講師として勤務していた3年目に、初めて一次試験に合格することができました。その際、曾我先生に連絡をしたところ、二次試験対策として教職特別講座に参加させていただくことになりました。そこでの演習の成果もあり、その年に採用試験に合格することができました。

この教職特別講座があったからこそ、今の私が教員として頑張れているのだと思っています。何より、曾我先生が教員のやりがいについて幾度となく語って下さったことが、私にとって大きな支えとなっています。もちろん苦しいこともありますし、今年度は私にとってチャレンジの多い一年でした。しかし、それらを乗り越えられる人間力を高めてくれたのは、間違いなく教職特別講座です。現役の大学生の皆さんには、ここでの経験を大切に、教員を目指してほしいと思います。教員という職業は、私にとって「天職」です。皆さんと一緒に働ける日を楽しみにしています。

曾我先生、本当にありがとうございました。そして、長年の勤務、お疲れ様でした。

令和3年3月卒業
宮崎県立宮崎商業高等学校 興相宗真さん

現在、宮崎県立宮崎商業高等学校で勤務している興相宗真です。

大学時代に受講した曾我先生の教職特別講座には、たくさんの思い出が詰まっています。公立大の教職特別講座には、教員採用試験というとても厚い壁を乗り越える環境が整っていました。教職特別講座の仲間とは異校種が混ざり合いながら、ほとんど毎日顔を合わせて、互いに目標を共有しながら学習を進めることができました。勉強が手につかなかった時期も、採用試験のプレッシャーに負けそうになる日もありましたが、一緒に戦っている仲間がいたからこそ、1日1日を乗り越え、採用試験まで根気強く勉強をすることができました。ときには居残りで勉強したり、仲間の家に集まって深夜まで勉強したりしたことも、青春の思い出として深く刻まれています。また、曾我先生のご経験によって準備された教職特別講座は、ここでしか体験できないものだったと思います。校長や面接者としてのご経験がある曾我先生の講座や資料は、市販の対策本とは違い、毎日違うテーマに関して資料を準備してくださり、実際の現場の知識と共に生きた知識を蓄えることができました。そのおかげで、教職教養の試験は満点に近い点数を取ることができました。二次試験対策も、先生や仲間と共に切磋琢磨して授業や面接を磨きました。私は大学生のうちに採用試験に合格することはできませんでしたが、それ以降の採用試験でも、大学時代に学んだことを活用することができました。

令和7年度で曾我先生がご退職されるということをお聞きし、胸に穴が空いたような気持ちになりました。私が教員を続けていく中で、頻繁に連絡を送り合うわけではありませんが、いつも心の拠り所にしてきた存在だったんだなと気付かされました。曾我先生や仲間と過ごしたあの時間、あの空間は私にとって実家のような存在です。

曾我先生からいただいた「教師というものにはなれない」という言葉をよく思い出します。私の中では、「教員は、師匠のように上からものを言うのではなく、生徒と同じ目線で寄り添いながら一緒に成長する」と噛み砕いています。これからも、曾我先生から学んだ知識や経験を活かして、よりよい教員を目指していきたいと思っています。

令和6年3月卒業
和歌山県立那賀高等学校 桶谷宗史さん

曾我先生、長期にわたるご指導、本当にお疲れ様でした。先生が公立大学に在任されている間に教職特別講座で学ぶことができた私は、本当に幸運だったと感じています。講座を振り返ると、「とても大変だった」という言葉が真っ先に思い浮かびます。大学3年生から始まった第一次試験対策では、法律や答申など覚えることが多く、何度も心が折れそうになりました。それでも、曾我先生の熱心かつ思いやりのある指導と、同じ志を持つ仲間と励まし合いながら学べる環境があったからこそ、困難を乗り越えることができたのだと思います。大学4年生では、面接や、集団討論、小論文作成など第二次試験に向けた演習を通して、教職の本質に真正面から向き合いました。どんなときでも、曾我先生は常に親身になって寄り添ってくださり、面接指導や小論文の添削など、さまざまなお指導を通じて支えてくださいました。その中でも先生に話していただいた、「使命感」という言葉が記憶に残っています。卒業論文の作成と並行しての取り組みは非常に大変でしたが、現場で求められる実践力を養うことができたと感じています。この講座で学んだことは、知識だけではありません。教育に向き合う姿勢、人との接し方、そしてどんな場面でも冷静に判断し、行動する力などの人間性の部分も学ばせていただきました。それらすべてが、今の私を支えています。曾我先生のもとで学ばせていただいた2年間は、私の現在を支える礎になっています。先生は退任されますが、先生の教えや考え方、学んだことを受け継ぎ、生かしていきたいと考えております。これからもお体に気をつけてお過ごしください。本当にありがとうございました。

令和4年3月卒業
神奈川県立綾瀬西高等学校 朝倉智恵さん

私が教職特別講座に参加したのは、大学3年生の10月頃でした。当時はまだ教員採用試験に対する意識が薄く、何から手をつけてよいか分からない状態でした。しかし、この講座で教職教養の勉強を始めたことが、試験に向けて本格的に勉強に取り組む大きなきっかけとなりました。教職教養の内容は膨大で、独学で網羅するのは困難に感じていましたが、先生が用意してくださった資料を使うことで、効率的に全体を学ぶことができました。また、2次試験対策として行われた、面接演習や模擬授業演習も貴重な経験でした。

特に面接演習では、曾我先生と何度も繰り返し実践し、その都度丁寧なフィードバックをいただきました。自分では気づけない癖や言い回しなどを指摘していただけたことは、大きな自信につながりました。模擬授業演習では、仲間同士で互いに授業を見合い、良かった点や改善点を率直に伝え合うことで、自分の授業を客観的に見直すことができました。曾我先生からも的確なアドバイスをいただき、本番に向けて納得のいく授業をつくり上げることができました。

この講座を通して得た学びや努力の積み重ねは、教員となった今でも確かに自分の中に生きています。現在、教員4年目を迎え、日々生徒たちと向き合う中で、あのときの経験が自分の土台になっていると実感しています。熱心にご指導くださった先生、共に学んだ仲間たちに、心から感謝しています。本当にありがとうございました。

道徳の教科化に思う！（シリーズ106）

最終回

平成29年の6月号から106回にわたり、「道徳の教科化に思う」をテーマに、道徳授業の本質的な在り方等について連載してきましたが、今回が最終回となりました。長い間、ご愛読いただき、本当にありがとうございました。

最後に、道徳教育（道徳授業）についての私の思いを述べさせていただき、このシリーズを終わりたいと思います。

学校現場では現在もなお、道徳の教科化に伴い問われている、道徳授業の姿が見いだされていません。これから道徳授業をどのように実践していけばよいのかという、先生方の戸惑いの声も聞こえてきます。それは、ジレンマ学習が話題になったり、問題解決的な学習や議論を中心とした学習などが方法論として強調されたりしていることにも、要因があると思います。先生方には、様々な方法論に関する情報過多の中で、道徳授業の在り方に迷いがあるのではないのでしょうか。「このようにすればいい、あのようにすればいい。」などの方法論に、納得感がもてない先生方が多くおられると考えます。私は、決して方法論のすべてを否定しているわけではありませんが、指導のねらいに即して適切に取り入れることを忘れてはならないと思います。そして、何より重要なことは、道徳授業の内容論「抛り所」を明確にしていくことだと考えるのです。本シリーズでは、そのことを踏まえ持論を述べてきました。私は学生の皆さんだけでなく、学校現場の先生方等にも教職支援の一環として、少しでも支援ができればと考え、本シリーズを掲載してきました。

また、本シリーズの中で学生の皆さんや先生方等にお伝えしたい、更なる願いもありました。それは、道徳の授業力向上を目指すことにより、児童生徒に限りない教育的愛情を注ぎ続けることができる「教師力」の大切さや、先生に胸襟を開く児童生徒の素晴らしさを道徳授業の中で体感してほしいという願いです。特に、これからさらに「教師力」を身に付けなければならない若手・中堅の先生方には、方法論に流されず自分の発想を生かしながら内容論で勝負し、道徳授業の素晴らしさを体感してほしいと願います。現在、即授業に役に立つとされる書籍等もありますが、少なくとも道徳授業においては、「このようにすれば、すぐに授業がうまくいくようになる。」という方法論的な考え方だけで、授業力が向上するとは考えられません。教師が研究実践を地道にこつこつと積み重ねていくことが大切であり、そこには様々な苦労や悩みなどが伴うとは思いますが、そのような中であるからこそ「教師力」が徐々に、しかも着実に養われていくと考えます。授業力さらには「教師力」を求めることは、奥が深く、広く、限りのないことであると思うのです。本シリーズは、決して即効的に役立つものではなかったのかもしれませんが、しかし、自分に「教師力」を求めたい先生方には、本シリーズの真意をご理解いただけるものと確信しています。これから学校教育においては、社会情勢や時代の変化に伴い様々な新しい教育制度やシステム等が出てくると思いますが、教師には、変わらない、変えてはいけない普遍的な「教師力」があると信じています。

最後に、私の尊敬する先生のお言葉を紹介して終わることにします。

教師は、「師魂の矢」を千発放って一発当たるかどうか。苦しい中で、児童生徒や保護者の方に打ち続けなければいけません。そして、当たったときの喜びが跳ね返ってきます。

「教育とは流水に文字を書くようなはかない仕事でもある。しかし、それを巖壁にのみで刻むような真剣さで取り組まねばならない。」という理念のもとに、教師は「師魂」の矢を打ち続けるのです。魂のこもった矢を打ち続けるのです。

これは教育の根幹であり、教師としてもっていなければならない理念だと思えます。根気強く、根気強く、根気強く支援すること、「信じること」と「継続」ということ……………この理念は、教育における不易のものです。

本シリーズを読んでいただき、本当にありがとうございました。完

